

# 研究紀要

〔56〕

令和6年3月

大阪府立中央聴覚支援学校

## 目次

1.	校内研究会報告 2023年度 校内研究について 聴覚障がい教育の専門性向上をめざしたリフレクション ～ICTを活用した保育・授業改善～	…	研 究 部
2.	リフレクションをとおして考える幼児への関わり方 ～自立活動の観点をふまえた実践をとおして～	…	幼 稚 部
3.	「聴覚障がい教育の専門性向上を目指したリフレクション ～小学部での取り組み～」	…	小 学 部
4.	きこえない・きこえにくい子どもの見え方、感じ方に基づいた授業リフレクション ～ICT機器を活用して～	…	中 学 部
5.	生徒参加型の行事運営とリフレクション	…	高 等 部
6.	「寄宿舎におけるリフレクションの重要性」	…	寄 宿 舎
7.	全日聾研第2分科会 幼児との関わりから見えてきた、コミュニケーションを広げるための取り組み ～日々の保育を通して、伝え合う力を身につけるために～	…	幼 稚 部
8.	全日聾研第8分科会 聴能担当の専門性向上及び継承に向けた取り組みについて ～事例検討会（近畿教育オーディオロジー研究協議会）での学びをとおして～	…	中 学 部
9.	全日聾研第7分科会 自分を知る、相手に説明する力を育む自立活動 ～聴覚障がいの先輩から学ぶ場を通して～	…	中 学 部
10.	全日聾研第13分科会 聴覚支援学校における社会科の授業について ～「覚える」から「考える」授業づくりへ～	…	中 学 部

※本紀要の用字・用語につきましては、「教育要領」「学習指導要領」を基本とし、大阪府やろう教育特有の表記を織り交ぜたものとなっており、報告により異なっていることがあります。

研究テーマ 「聴覚障がい教育の専門性向上をめざしたリフレクション  
～ICTを活用した保育・授業改善～」

### 1. テーマ設定の理由

昨今、聴覚に障がいがある幼児、児童、生徒を取り巻く環境は、日々変化している。コロナ禍に加え、医療技術の進展により聴覚障がいがあることの早期発見、乳幼児期から人工内耳を装用する子どもの増加、補聴器や補聴援助システム等の発展などが考えられる。そのなかで、本校では聴覚に障がいがある子どもだけでなく、他の障がいを併せ有している子どもの在籍も増加傾向にある。よって子どもたちの実態は多様化していると考えられる。子ども一人ひとりの実態を把握し、指導支援を行いながら、集団での保育や授業を展開するためには、専門的な技術や知識を得ながら、保育や授業の質を高める必要がある。

2022年度には、各学部において子どもの見方や指導支援についてリフレクションを行った。リフレクションのなかで研究したことをより実践に繋げ、さらなるリフレクションを行う必要があると考える。また保育や授業を展開するなかでICT機器を教員だけでなく子どもも活用し、子どもたちの知的好奇心とともに情報処理能力等をより高め、生きる力を身につけ、個々の可能性を広げingことをめざして研究を進めていきたい。

上記のことを踏まえ、2022年度～2024年度の3年間の2年目の研究テーマを「聴覚障がい教育の専門性向上をめざしたリフレクション～ICTを活用した保育・授業改善～」にし、研究を進めていきたい。

### 2. 校内研究会 報告

(1) 日時 令和5年8月22日(火) 午前10:00～12:00

講師 京都教育大学 教職キャリア高度化センター  
大久保 紀一郎(おおくぼ きいちろう)氏

① テーマ 聴覚障がい教育とICTの在り方

② 要約

これからめざす授業の方向性についての久保氏からの問いかけからご講演が始まった。これからの子どもたちの学力向上のために、従来型の教員が内容を教える(先生がいないと学べない)のではなく、生涯学び続け、自立した学習者を育てることが大切であり、子どもたち自身が自力で未知の問題の解決に向かえる力を育てる必要があるとご講演いただいた。

また、個別最適な学びと協働的な学びの基盤としての情報端末・クラウド活用について、地域の小学校での具体的な事例をたくさん挙げていただいた。教員同士での議論の時間もあり、共有することができた。

全校職員でICT活用の在り方について地域の取り組みを知り、本校ではどんな取り組みができるのか深く考えるきっかけとなり非常に有益な研究会であった。

# リフレクションをとおして考える幼児への関わり方 ～自立活動の観点をふまえた実践をとおして～

幼稚部

## 1 目的

昨年度は、部内での勉強会や自立活動の観点から子どもの実態や保育についてのリフレクションを行った。リフレクションを行うことで自分自身の保育や子どもの観方を振り返り、次への取り組みに繋げるきっかけとなった。しかし、そのなかで日ごろの子どもへの関わりや指導支援について自立活動の観点到着目したところ、さまざまな保育のなかで子どもにとってどのような指導支援が自立活動につながるのかが明確になっていないことがわかった。

特別支援学校学習指導要領解説自立活動編（2017）では自立活動について『個々の実態把握によって導かれる「人間としての基本的な行動を遂行するために必要な要素」及び「障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服するために必要な要素」、いわゆる心身の調和的な発達の基盤に着目して指導するものが自立活動であり、自立活動の指導が各教科等において育まれる資質・能力を支える役割を担っている』と記されている。また『自立活動は、授業時間を特設して行う自立活動の時間における指導を中心とし、各教科等の指導においても、自立活動の指導と密接な関連を図って行われなければならない。』と記載されていることから日頃の保育と自立活動の指導が密接に関連する必要があることがわかる。

このことから日々の保育の実践や指導支援方法、子どもの実態把握の仕方についてリフレクションを行い、本校の幼稚部における自立活動と保育がどのように関連しているのかを検討・考察していく。

## 2 方法と内容

日々保育を展開するなかで感じる幼稚部の実態や課題を考慮したリフレクションと、自立活動の観点をふまえて保育実践を行うリフレクションの2つについて取り組んだ。

### (1) 幼稚部の実態や課題に応じた勉強会を実施

近年、本校の幼稚部では教員の異動等があることで専門性の継承が課題として挙げられる一方で子どもたちの実態や子どもたちを取り巻く環境も変化している。例えば聴覚障がいだけでなく他の障がいを併せ有する幼児の増加や放課後等デイサービス等、さまざまな療育園を利用する幼児の増加、ICT機器の普及などが挙げられる。その環境の変化のなかで私たち教員は常に学び続け、特別支援教育及び聴覚障がい教育、そして幼児教育の専門性を向上していく必要があると考える。

これらの実態をふまえ、幼稚部では教員同士が学び合える場として勉強会を実施した。勉強会の内容は年度当初に幼稚部の教員から学んでみたいこと・知りたいことをテーマにアンケートを実施した。その結果をもとに検討し、以下の4つのテーマについて勉強会を行った。

またテーマによっては他部にも勉強会について周知をし、参加を募った。

表1 令和5年度 幼稚部勉強会の実施内容

回	テーマ
①	絵日記指導について
②	保育で使える ICT
③	重複障がい児への関わりについて
④	子どもの心と体について

### ① 絵日記指導について

#### ア 目的

さまざまな聴覚支援学校の幼稚部で絵日記指導が行われている。本校の幼稚部においても放課後の個別指導の際に行っている。大塚、矢持、田中（2002）は『「絵日記」を媒介とするトータルな言葉の指導方法であり、日本人としての物の見方、考え方、感じ方、振舞い方といったものを育てつつ、同時にそれをシンボライズ（象徴化）した日本人共通の母国語である日本語を聴覚障害の幼児にも共有できるようにしようとするための方法である。』と述べている。このことから乳児期、幼児期にとって絵日記指導は必要不可欠な指導方法であることがわかる。しかし、本校の幼稚部では教員の異動や

重複障がい児の増加もあり、「絵日記指導について教員間で共通理解をしたい。」「どのような目的やねらいをもって指導をしたらよいのか。」と改めて学びたいという声が多く挙げられた。

#### イ 方法と考察

絵日記指導についてグループワークを行い、昨年まで本校の幼稚部で勤めていた加藤弓子先生にご助言をいただき指導方針やねらい、目的について検討した。

まず架空の幼児（年中児・主なコミュニケーション手段は手話・おおよそ 1～2 語文でやりとりをする・聴力レベル 70～80dB・療育手帳なし）を設定し、その幼児の保護者が書いた絵日記を提示した。その絵日記をもとに（1）どのような指導を行うか。（2）どのような目的をもって指導を行うか。

（3）保護者に何と声かけを行うか。という点について 4 グループにわかれて話し合った。

各グループの話し合いの中で 2 つの大切にしたいことを共有することができた。1 つ目は指導をする中で子どもが受け身にならずに主体的に発言したり身振り手振りで表現したりできるような指導支援をしていきたいということが挙げられた。加藤先生からの助言のなかに「教員ができること⇒個々の家庭状況や保護者のスキル、子どもの年齢・発達・言語力に応じて絵日記指導の内容や方法を工夫すること」という言葉があった。子どもの実態によって絵日記を見たときの反応は変わってくる。その時に教員は子どもの主体性を培うことができる関わりをすることが大切だとわかる。2 つ目は保護者の思いや保護者がわが子にどのような願いや展望をもっているのかということを読み取っていききたいことであった。絵日記指導は子どもと教員だけで行うものではなく、保護者もともに取り組んでいく活動である。よって子どもに指導支援しながら、同時に保護者の思いも少しずつ受けとめ、教員と保護者と子どもがともにねらいや目標をもって取り組めるような声かけや関わりをしていく必要があると改めて確認することができた。

### ② 保育で使える ICT

#### ア 目的

本校では ICT 機器が年々普及している。そのような現状はあるが、本校の幼稚部では保育のなかで幼児がタブレット端末を使用することはほとんどない。「幼児期では、実際に見て、触れて、といったような五感を感じる経験をすることが大切である。」または「保育のなかでどのように ICT 機器を活用するのがわからない。」といった意見が教員のなかで言われている。しかし丸山（2017）は『実体験を重視する幼児期にあえてタブレット端末などの情報機器を用いる理由についても、パソコンには他の道具にはない特徴として、失敗しても何度でもやり直しができるという点が挙げられ、このことで子どもが作品作りに取り組む際の緊張感や、失敗したらどうしようという恐怖心を緩和し、挑戦する姿勢や思考を繰り返し何度も作り直すなどの粘り強さを生み、より良い作品創りに自然と向かうようになっていかなければならないか」と考える。』『非認知能力の育成に効果的であると考える。』と述べている。これらのことから少しずつではあるが、本校の幼稚部でも ICT 機器を保育で活用し、子どもたちのこれからの社会を生き抜く力を培うことに繋げる必要があると考える。

#### イ 方法と考察

保育のなかで ICT をどのように活用するのかというテーマでグループワークを行った。また今回のテーマで話し合うときに、教員が ICT 機器を使用し、子どもに見せることを目的としたものではなく、子ども自身が活用できる保育を考えるという視点をもって行った。

話し合いの中で ICT を使用することに対する難しさや課題と ICT を活用することによって考えられる新たな可能性を検討することができた。まず、難しさや課題となる点は、幼児期の間は日常生活や学校でのできごとなど実際の経験を積むことで子どもの視野や考え方が広がるという意見が多くある。その一方でこれからの社会や環境の変化を考慮した際に ICT の必要性も感じられるという意見もあった。その考え方の狭間で私たち教員がどのように取り組めばよいのかという難しさと教員自身が ICT に触れることが少なかったために知識や技術が不足しているという課題を改めて考えることができた。そのなかで“こえキャッチ”というアプリで声の大きさを視覚的に捉えることができるため発音の指導に生かしたり、“GoogleEarth”や“YouTube”で実際に行けない場所や見ることが難しいものを見ることができたり、子どもたちがイメージを広げることに繋げられる。また“iPad”を使って絵を描くことでクレパスや絵の具が苦手だったり、難しさを感じたりする子どもたちも取り組むことができるのではないかとさまざまな可能性を発見することもできた。幼児教育のなかでも ICT を活用することで子どもたちの可能性を広げることができるということを共通理解することができた。しかし、ICT が目的になるのではなく、あくまでも手段であることも再認識できた。それもふまえたうえで、まずは私たち教員が子どもたちの将来を見据えて ICT 教育にも挑戦していくことが重要である。

### ③ 重複障がい児への関わりについて

#### ア 目的

本校の幼稚部に在籍している子どもは聴力レベルもさまざまであり、装用機器も補聴器や人工内耳と子どもによって違う。また他の障がいを併せ有する子どもも在籍している。しかし、補聴器装用児クラス、人工内耳装用児クラス、重複障がい児クラスといったようなクラス編成はしておらず、学年の集団のなかでともに過ごしている。そのなかで私たち教員は個々に応じた指導支援を行いながら、集団としての活動にも日々取り組むにはどのような関わりや指導支援が良いのか試行錯誤している。そこで、重複障がい児に対しての考え方や価値観を共有し、どのような指導支援ができるのかを検討した。

#### イ 方法と考察

3つのグループにわかれ、(1) 重複障がいがある子どもについて (2) 重複障がいがある子どもとの関わりについてというそれぞれのテーマに対して KJ 法を用いて各教員の考え方や意見を情報共有し、重複障がい児に対しての関わり方の課題や方向性を整理した。整理したなかで“集団活動”“保護者支援”“進路指導”“学校や幼稚部としての体制”という共通したカテゴリーが生まれた。このカテゴリーには幼稚部の教員が日頃考えたり、悩んだりしていることが含まれていた。“集団活動”というカテゴリーには集団活動をするなかで、一人ひとりの子どもの実態や課題に応じた指導支援を行うことの難しさがあり、“保護者支援”というカテゴリーでは学校生活だけではなく、家庭と連携しながら一貫性のある指導支援を行う必要性を再認識することができた。それらの難しさや指導支援の必要性を再認識したうえで、重複障がいがある子どもたちにとって今後の社会を生き抜いていくための力を培うことができるための日々の保育が重要であり、その保育や指導支援がカテゴリーにもあった“進路指導”に繋がり、また“学校や幼稚部としての体制”の見直しにも関わってくるということを幼稚部全体で共通理解することができた。

KJ 法を活用することで、教員の経験年数を問わずに全教員が視覚的に課題や今後の方向性を再確認することができ、さまざまな障がいがある子どもにこれからの社会を生き抜く力の基盤となるものを幼稚部で培う必要性を明確にすることができた。

### ④ 子どもの心と体について

#### ア 目的

子どもの心の成長には体の発達が必要不可欠であると考え。中野 (2019) は近年幼児教育のなかで注目を浴びている非認知能力について『子どもの体力・運動能力に関しても、近年は幼少期からの取り組みの重要性が唱えられており、その際に重視されていることも、測定値ばかりではなく意欲や前向きな心、活動的習慣の獲得などである。これらは、まさに非認知能力と直結するものであると言える。』と述べている。このことから子どもの体や運動機能の発達は心や感情の成長に繋がると思われる。そこで、子どもの姿勢や歩行、座位などの仕組みや体の発達を知り、適切な指導支援を行い、豊かな心の成長を促す関わりとは何かを考える。

#### イ 方法と考察

株式会社橋善 代表取締役 理学療法士 橋本充浩氏より子どもの心と体の発達についてというテーマで講演をしていただいた。講演では実際に体を動かし、教員同士で子どもの体の成長や発達に応じた指導支援の方法を体験することができた。実際に講演を聞き、指導方法を体験することで、子どもたちそれぞれの現時点での成長と発達を把握することがまずは重要であることがわかった。子どもによって障がいの実態はさまざまであり、発達段階も発達課題も個々によって違いがある。しかし生活年齢があがることで、生活年齢に相当した体へのアプローチをしなければならないという思いから、その子どもの発達段階に応じていない関わりをしてしまうことがある。橋本氏の講演のなかで「発達課題は子どもそれぞれの発達段階においての実現目標であり、それらを達成することにより、次の課題が達成しやすくなる」とあり、先を急いで指導支援することは子どもの成長や発達を妨げることにもなるということを改めて考え直すことができた。子どもが成長、発達するためには人と関わる必要がある不可欠である。その関わりが適切な指導支援となるためにもそれぞれの子どもの体の成長、発達段階はどこであるのかを正確に把握し、さまざまな専門機関との連携もとりながら進めていきたいということを共通理解することができた。

#### (2) 日々の保育をリフレクションし、自立活動との関連性を考察、検討する

特別支援学校学習指導要領解説自立活動編 (2017) にも『各教科等の指導においても、自立活動の指

導と密接な関連を図って行われなければならない。』と記されているように、幼稚園ではさまざまな保育が自立活動の指導と密接に関わる必要がある。

昨年度は実際の保育に生かすことができるように3つの自立活動（1）発音（2）言語（3）聴能が子どものどのような活動や教員の指導支援に繋がるのかを振り返った。今年度は、早期教育相談、3歳児、4歳児、5歳児と各学年から1名の教員が研究保育を行い、自立活動が実際の保育にどのように関連付けられるか、より密接な関連付けをするためにはどのような活動や指導支援が良いのかをリフレクションをとおして検討した。

表2 研究保育実施内容

実施日	学年	活動名
10/24	4歳児	ふゆごもりするいきものをしろう（話し合い活動）
10/27	早期教育	さわってみよう（感触遊び）
12/1	5歳児	これ、なーんだ？（ルールのある遊び）
12/15	3歳児	たまごのあかちゃん（絵本とリトミック）

まず保育者が自身の保育のなかで自立活動の視点をふまえた活動や指導支援がどこでどのように組み込まれているのかを客観的にリフレクションができるように指導案の本時の活動の流れ：環境の構成と保育者の援助の欄で記載されている指導支援のなかで、自立活動に関連付けられているものには下線を引き、どの自立活動と関連性があるのかを明記した。そのことで、保育者自身が指導支援のねらいや目的を再確認することができ、子どもの実態に応じた自立活動の取り組みを日頃の保育や関わりのなかで実践していこうとするそれぞれの教員の考え方や価値観を共有することができた。

次に作成した指導案をもとに研究保育を行い、実施後各研究保育についてグループワークをとおしてリフレクションを行った。グループワークのテーマとして（1）保育を参観し、どの場面が自立活動に関連していたのか。（2）より自立活動に関連させるためには、どの場面をどのように工夫することが大切か。」という2点を示した。

4つの研究保育のリフレクションのなかで学年は違えども、共通した指導支援があることを確認した。その指導支援の1つは、ことばや事柄に対して繰り返し確認をしたり、アプローチをしたりすることである。幼児期においてさまざまな事柄が1度の経験ではなく、繰り返し経験をすることでその子どもの知識や技能に結びついて学んでいることが多いと感じる。例えば、登校してからの朝の準備（手洗い、うがい、着替え、出欠ノートのシール貼り、補聴器の電池の有無の確認など）も1度するだけで覚え、理解することは難しく、何度も経験することで覚え、理解して行動に移すことができる。今回の4つの保育にも繰り返し同じことばを子どもとともに発言したり、教員が同じことばを繰り返し子どもに発信したり、繰り返しの表現がある絵本を取り入れたりとアプローチ内容に違いはあるが、繰り返しということを大切にしていることがわかった。繰り返しのアプローチがあることで、ことばとして定着し、発声・発語の手がかりになり、聴覚への刺激にも繋がる。この指導支援はどの学年においても、自立活動の要素に深く関わるものであることがわかった。また、もう1つの指導支援として、実際に経験・体験をするということがあげられる。早期教育、3歳児の保育では手で触ったり、体を動かしたりしてその場で実際に経験することがあった。4歳児、5歳児の保育では日常生活のなかで経験したことをことばやイラスト、写真などで表したり、ときにはその経験に関連する実物を用いたりしている場面があった。子どもにとってさまざまな感覚を使って感じることは、子ども自身も持っているイメージと繋げたり、イメージとは違う視点を発見したりすることができると思う。そしてその経験が自立活動の要素の成長、発達を促すことになるだろう。

また学年ごとにある1つの関わりのアプローチ方法が変化していることに気づいた。それは、待つ＝見守るという関わり方である。どの学年の保育にも教員が子どものその時々様子や保育の流れを考慮して子どもの次の言動や行動を待つ場面があった。しかし待ち方や待つ時間にそれぞれの違いがあった。早期教育相談では子ども自身で活動に参加するために、さまざまな物を提示し、常に子どもの視界で物事が動いている様子を見せながら待つというアプローチ方法をとっていた。しかし学年を重ねるごとに、待つ時間も長くなり、子どもが自ら考えて発言や行動ができるように、子どもの様子を見ながら提示するものを増やしたり減らしたりするアプローチ方法をとっていることが多い。グループワークのなかでも各学年の保育のなかで、待つことの大切さについて話し合われていた。待つことで子どもの発言や発声に繋がったり、子ども自身も待つことの意味を捉え、きく姿勢に結びついたりするのではないと思われる。待つというアプローチのなかでも子どもの実態やそのときの集団の様子、保育の流れによってさまざまな形に変化し、子どもの主体性を培う大切なアプローチだとい

うことを考えることができた。

各学年の保育を指導案に示し、自立活動の観点をふまえて保育を行い、幼稚部の教員全員でリフレクションを行ったことで指導支援方法の共通点や相違点を検討することができた。また保育を行ううえで何を大切にしていきたいのかということを経験者同士で再確認することもでき、今後の保育に生かすきっかけとなった。

### 3 考察とまとめ

今年度は現在の幼稚部の課題や実態を考慮した勉強会を実施し、日々の保育と自立活動の関連性についての検討・考察を行い、研究を進めてきた。研究をするなかで、以下の2つのことが明らかになった。

1 点目は、勉強会をとおして教員同士がコミュニケーションをとることは日頃の子どもとの関わりや保育のリフレクションとなることである。

上記で述べたように本校の幼稚部も教員の異動等があり、教員経験年数が若い教員、さまざまな支援学校を勤務し聴覚支援学校に転勤した教員、長年本校で勤務している教員と教員の実態も多種多様である。そのような状況があるなかで、中央教育審議会では『教師が協働的に授業を作り上げていく体制や、教員が互いに円滑なコミュニケーションをとれる雰囲気作り・環境作りが、これからの学校作りには必要。』と述べている。今回、4つの勉強会をとおして学年を超えて教員同士が意見交換を活発に行うことができた。話し合いやグループワークを行うなかで、同じ意見や考え方をもっている先生がいるという安心感に繋げることができ、こんな観方もあるのだという気づきや新たな発見があり、これからの幼児教育や聴覚障がい教育の視野を広げることができた。このような機会を作ることは自分自身のリフレクションになるだけでなく、幼稚部の運営が円滑になるきっかけにもなったと考える。

2 点目はさまざまな保育のなかに自立活動の観点はふくまれており、さらに教員の指導支援においても自立活動を関連させていることがわかった。今回行った研究保育の内容は①話し合い活動 ②感触遊び ③ルールのある遊び ④絵本とリトミックと異なっていたが、どの保育にもその時間のキーワードになることばを子どもとともに確認する場面があったり、子どもが発言する際には発声や発語を促す指導支援があったり、教員や子どもの話をきくように促す様子があったりと自立活動の観点に繋がる活動や指導支援が多く見られた。これらの活動や指導支援は自立活動の指導支援に一貫性をもたらし、自立活動が単体で行われているものではないことがわかる。このように日頃の保育と自立活動が関連して行われていることで、子どもそれぞれの成長や発達により良い影響をあたえたと考える。また今回研究保育を行った教員から「指導案を作成し、研究保育を行ったことでより丁寧に指導支援を考えることができ、安心かつ楽しんで保育を行うことができた。」という意見があった。これは今回の研究保育をきっかけに教員自身が日頃の保育のリフレクションを行い、指導支援のどこに重点を置き、子ども一人ひとりの実態や課題を考慮することが必要不可欠であるということを示す。

今年度の研究をとおして、日々の保育の実践や指導支援の方法、子どもの実態把握の仕方についてリフレクションを行い、自立活動の観点が日々の保育に大きく関連していることがわかった。しかし実際行われているさまざまな保育のなかに、どの指導支援がどの自立活動の取り組みに関連しているかという共通した視点をもつことができる指標となるものはない。さまざまな考え方や感じ方をもつ教員がいるなかで、ある一定の共通した観方を示すことでより一貫性のある指導支援を行うことができると考える。そのため乳児期から幼児期までの発達段階を理解し、聴覚障がいがある子どもにどのような指導支援を行うことが必要なのかをリフレクションをとおして整理し、より見通しがもてる教育を行い、社会で生き抜くことができる子どもの力を培えるようにしていきたい。

### 引用文献

大塚明敏・矢持九州王・田中伸子(2002) 聴覚障害幼児に対する絵日記を用いた言葉の指導について—絵日記アプローチ—。長野大学紀要, 23, (4), 137-165

丸山幸三(2017) 幼児教育における ICT 活用について—ワークショップ実践から見えてきた情報教育のあり方—。豊岡短期大学論集, No14, 103-112

中野貴博(2019) 身体活動と非認知能力の関連性—非認知能力は体力・運動能力とも強く関連する—。体力化学, 第68巻, 第1号, 36-39



# 「聴覚障がい教育の専門性向上を目指したリフレクション

## ～小学部での取り組み～」

小学部

### 1 はじめに

本校では、多様な児童の実態を考慮し、それに応じた支援や指導を行うことが求められている。そのため、手話や視覚的支援など、聴覚障がい教育における専門的な知識や技能の習得や、多様な子どもたちに対応できる指導力が必要になってくる。

近年においては、小学部でも ICT 教育を活用した指導教材が多い。しかし、個人で作成した教材に関しては、他の教員との教材の意図や目的、使用方法の共有が課題となっている。

そこで、今年度は専門性の向上、および継承に向けて、以下のことに取り組んだ。

- ① 年次研の指導案検討会、討議会の実施、チェックリストを活用した指導技術の向上
- ② 聾学校における ICT 活用の専門性向上の学習会の実施

上記の①・②を行うことにより、聴覚障がい教育の専門性の継承、およびリフレクション（教員一人ひとりが自分の授業や指導を振り返る）が行われ、その結果、教員の資質向上へとつながると考える。具体的には、下記の通り研究活動を進めた。

### 2 研究活動の概要

#### (1) チェックリストを活用した指導技術の向上

初任者研修や年次研修で研究授業を行う教員は、昨年度まで使用していた聴覚障がいの専門性チェックリスト（アドバイスシート）をもとに、自身で研究授業の振り返りを行った。また、そのチェックリストの集約を行い小学部教員の中で共有した。

#### (2) 授業後の振り返り

今年度の研究授業者は初任者研修 1 名、インターミディエイトセミナー1 名、アドバンストセミナー3 名の合計 5 名であった。今年度は、授業後に授業者全員の討議会を設け、参観者全員が討議会に参加する形で進めた。

#### (3) 学習会

小学部全員が参加する学習会を企画した。内容は次の通りである。

- |       |  |
|-------|--|
| 1.テーマ | 聴覚支援学校における ICT 活用について  |
| 2.日時  | 令和 5 年 7 月 31 日（月）13：00～16：00  |
| 3.講師  | 稲葉 通太（大阪府立堺聴覚支援学校 教諭）  |
| 4.内容  | ① 講師の稲葉教諭より具体的な ICT 教材の紹介。（作成した教材の意図、またその背景、ICT 教材を作成する際特に留意する点について）<br>② グループ内でテーマに沿った ICT 教材の作成。<br>③ グループごとに発表。 |

### 3 研究活動の成果と課題

#### (1) チェックリストを活用した指導技術の向上

昨年度に引き続き、チェックリストを活用して年次研修（初任者研修、インターミディエイトセミナー、アドバンストセミナー）の研究授業を実施した。チェックリストには聴覚障がい教育の専門性についての観点が明記されているため、授業者が授業を組み立てる上で参考資料となった。また、参観者は授業のどこに着目して評価すべきかが明確になったと考える。来年度についてもチェックリストの活用を推進したい。

## (2) 授業後の振り返り

今年度は、研究授業指導案検討会を取り入れた。この意図は、研究授業指導案を作成する段階で全員で協議する場を設けることで授業者・参加者双方の教員が日頃の授業計画段階からのフローについてもリフレクションを実施することができる考えたものである。JamBoardを活用し、参加者が事前に授業者の指導案を閲覧、意見を付箋で貼り付ける方法で進めた。それを受けて検討会を実施した。指導案に関する質問が出て、「私だったらこうする」といった、指導案にはなかった他の視点の意見が続出した。授業者にとっても指導案を作成していく段階でリフレクションを実施でき、改善につなげることができた。研究授業討議会では、討議会参加者が意見やアドバイスを伝えることで、授業者だけではなく参加者一人ひとりが研究授業について日頃の授業と結びつけながら意見交換やリフレクションをすることができる場となった。

## (3) 小学部学習会

聴覚障がい教育において視覚的な補助的ツールの一つとして ICT 活用が考えられる。今日の聴覚支援学校で児童に指導をする際に ICT 活用する教員は多く占めており、ICT 活用は必要不可欠だといえる。その一方で、ICT 活用は幅広く、どのように ICT 活用していけば良いのか悩んでいる教員は少なくない。そこで、ICT 活用をどのようにしていけば良いのか知り、日頃の自身の ICT 活用についてリフレクションを行う良い機会となると考え、小学部学習会を実施した。講師に大阪府立堺聴覚支援学校の教諭 稲葉通太先生を招聘し、「聴覚支援学校における ICT 活用について」お話しいただいた。稲葉先生は長年聴覚支援学校において PowerPoint を中心に ICT 活用における多くの実践を積んでこられた。前半は稲葉先生が ICT を活用するに至った経緯や実践についてのお話をしていただき、後半はグループに分かれてテーマに沿ったグループワークを実施した。前半の ICT 活用に関する話では6つのポイントに沿ってお話しいただいた。①「ビジュアルに表現」②「こどもが使えるアプリ」③「つながるための活用」④「アクセシビリティの充実」⑤「生成系 AI の活用」⑥「デジタルシチズンシップ」である。例えば①「ビジュアルに表現」では、ただ闇雲にアニメーションを使用するのではなく、児童が視覚的に理解しやすいようにアニメーションを活用して提示することが大事だということが示された。「東京ドーム○○個分」という例を示す場合、文字やイラストのみで示すのではなく、聴覚に障がいをもつ児童が理解できるためのアニメーションや図示を工夫する必要がある。稲葉先生が特に強調していたのは、「聴覚支援学校だからこそ、ICT に取り組める」ということであった。本校は聴覚支援学校だからこそ、授業だけではなく、学校生活内における様々な場面で ICT 活用が考えられる。また、コロナ禍でオンライン学習が進展してきたが、コロナ禍が終息した後もオンライン学習を止めることなく、今後もオンライン学習によって様々な可能性を広げられることを再認識した。聴覚支援学校だからこそできる取り組みとはどのようなものなのか、多くの可能性があるということを学ぶ学習会となった。

資料1

大阪府立中央聴覚支援学校小学部 授業アドバイスシート

年 月 日 曜日 時間目 教科 ( ) 指導者 ( )

評価は、◎…十分達成されている ○…概ね達成されている △…努力が必要 で記入してください。

項目	内容	評価	アドバイス (気づいたこと)
基礎的 授業に おける 環境整備	1 児童は、授業の準備(教科書など)ができています。		
	2 安心して授業に集中できる雰囲気がある。		
	3 必要のない情報が目に入らないように工夫している。		
	4 私語をしない・話をしている人の方を見るなどの学習規律が徹底している。		
	5 事故防止に努め、安全への配慮を行っている。		
	6 互いの顔が見えるような机の配置になっている。		
基礎的な 指導技術	1 指導案が適切に作成されている。		
	2 板書をわかりやすく工夫している。		
	3 考えを発表したり書いたりする場面を設定している。		
	4 教材やワークシートを適切に活用している。		
	5 単元名が提示されている。		
	6 めあて(目標)を提示している。		
	7 色分けしたりして、見てわかる板書になっている。		
	8 視覚的教材を活用している。		
	9 導入を工夫している。		
	10 話す速さが適切である。		
	11 明確でわかりやすい指示や説明をしている。		
	12 書かせるとき、話すときを区別できている。		
	13 児童の注目を集めてから話し始めている。		
	14 座り方や書き方の指導ができています。		
	15 児童に顔や口元が見えるようにしている。		
	16 児童に伝わりやすい方法(手話、指文字、音声など)で表現している。		
	17 児童の発表や説明を尊重して授業を行っている。		
	18 考えを発表したり書いたりする場面を有効に活用している。		
	19 児童が本時で学んだことを、自分のことばでまとめている。		
	20 児童がめあてを達成している		
ティ ー グ ー ム	1 授業の流れを把握し、次の活動が円滑に進むようサポートをしている。		
	2 児童に、指導者を見るよう促している。		
	3 必要ときに児童の指導助言をしている。		
発 展 的 な 指 導 技 術	1 児童の実態に合わせて指導助言を行うなど、適切な対応をしている。		
	2 授業の流れがわかるような工夫をしている。		
	3 時間配分がうまくできている。		
	4 教員が授業づくりに関して大切にしていることがある。		
その他			

記入者( )

# きこえない・きこえにくい子どもの見え方、感じ方に基づいた授業リフレクション

## ～ICT 機器を活用して～

中学部

### 1 はじめに

令和4年度より、本校では研究テーマを「聴覚障がい教育の専門性向上をめざしたリフレクション」と設定している。中学部では、長期にわたって、中学部において生徒一人ひとりの見え方、感じ方を教員自身が振り返るとともに、生徒も「本当にわかったのか」「わからないときどう行動するか」を振り返り、よくわかる授業へとつなげていきたい。そこで、昨年度に引き続き、子どもの「視覚的な認知」に注目し、それに基づく授業リフレクションを研究テーマとして進めることにする。子どもにとってわかりやすい手話表現、教材提示、板書・スライドになっているかを振り返り、私たち教員の授業省察の足がかりとする。

本稿では、中学部社会科における取り組みを紹介したい。この取り組みは第57回全日本聾教育研究大会（以下、全日聾研）の分科会（中高文系）においても発表した。これらの取り組みを踏まえて、中学部が今後めざしていくべき方向性について検討していきたい。

### 2 研究活動—成果と課題

#### (1) 中学部の概要

本年度の中学部の生徒数は31名（中学部1年8名、2年10名、3年13名）である。全ての生徒にタブレット端末が配付されており、グループウェア用アカウントも一人ひとりに付与されている。授業にはタブレット端末が欠かせないほど、本校中学生にとって常時必要なツールとなってきた。また、研究紀要〔55〕にも掲載したとおり、中学部の各教室に電子黒板機能付き超短焦点プロジェクターや電子黒板が設置され、いつでもどこでも直接タッチペンを用いて画面に文字を書き込めたり、文章や画像などの同時提示が可能になったりした。このことは、教員の教材研究のありようを変えた。「どのように子どもに文章や画像を見せるか」「スライド資料をどのように用いるか」が焦点となった。授業の展開をスムーズにする利点も大きいですが、他方で必要な知識や情報を子どもたちにどう伝えていくかといった課題に対しても向き合っていかなければならない。

#### (2) 中学部社会科における取り組み

中学校に準ずる教育課程を受けている生徒22名に社会科に対するイメージ調査を行った。今回は、学習支援クラウドサービス内にあるフォームを用い、単一回答法で行った。

表1 社会科に対するイメージ調査について

質問項目	結果
社会科は得意である。	35.3% (7人/22人)
社会科は苦手である。	64.7% (15人/22人)

表1のとおり、「社会科が得意である」は回答した生徒は全体の3割程度に留まり、半数以上が苦手意識を抱いていることがわかった。「得意である」と回答した生徒の理由を分析すると2点に大別された。1点目が「もともと歴史が好きであること」、2点目が「覚えることに自信があること」である。次に、「苦手である」と回答した理由には、「文章問題が苦手」と回答する生徒がほとんどであった。また、「覚えるのが苦手だから」「人の名前を覚えられない」といった「記憶する」ことに対してネガティブなイメージをもっていることがわかった。

本結果から、「社会科は暗記科目」と捉えている生徒が半数以上いることが明らかになり、そこで昨年度より、社会科の授業のあり方について、社会科教員で様々な議論を交わした。議論していくうちに、まず「子どもの興味・関心を引き出すこと」と「論理的に考える力を伸ばすこと」の2点に重きをおくことにした。令和3年度より新学習指導要領が全面的に改訂・実施され、「主体的・対話的で深い学び」が一層推進されるようになった。この主体的に学ぶ力を身につける前提として、

「興味・関心」が欠かせない。そして、社会科では、社会的事象を説明する能力も問われている。高校入試でも出題されていることから、論理的に物事を考え、筋道を立てて説明できるようにすることをめざした。この2つの力を育むために、本年度は「ICT活用の可能性を広げる」「記事問題を通して」「外部機関との連携」の3つを柱に授業を組み立てた。

① 3つの柱―「ICT活用の可能性を広げる」「記事問題を通して」「外部機関との連携」

先述のとおり、生徒一人ひとりにタブレット端末が付与され、社会科ではデジタル資料やインターネットの活用のほか、学習支援クラウドサービスを用いた小テストやレポート作成を取り入れた。

表2 社会科における学習支援クラウドサービスの使用状況（令和5年度）

名称	使用用途	メリット	デメリット
グループウェア	課題の指示 質問コーナー	<ul style="list-style-type: none"> <li>・課題の指示やワークシートの配付が迅速にできる。</li> <li>・欠席生徒への共有が同時に行える。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・家庭によるネット環境の差に左右される場合がある。</li> <li>・自分の手に残るものがない。</li> </ul>
フォーム	小テスト アンケート調査	<ul style="list-style-type: none"> <li>・書くことに苦手意識を抱いている生徒の知識理解を把握することができる。</li> <li>・生徒の理解度を常に確認できる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・漢字などの読み書きを伸ばすことがおろそかになる。</li> <li>・自分の手元に回答結果が残らない。</li> </ul>
ドキュメント	レポート作成	<ul style="list-style-type: none"> <li>・書くことに苦手意識を抱いている生徒が意欲的に取り組めるようになる。</li> <li>・文章の修正や訂正が速やかにできる。また、教員のフィードバックを得て、推敲することが速やかにできる。</li> <li>・分からない時は即座にインターネットで調べることが可能。</li> <li>・論理的な文章を作る力が身につく。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本語の読み書きが苦手な生徒にとっては、身につくまでに時間がかかる。また、読み書きの指導がおろそかになる可能性がある。</li> <li>・教員の準備、指導、評価、フィードバックに時間がとられてしまう。</li> </ul>
デジタルホワイトボード	画像、図の提示 板書 意見交流	<ul style="list-style-type: none"> <li>・他の生徒の意見を同時に見ることができ、交流につながる。</li> <li>・流れを理解することが容易になる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・見てわかったつもりになってしまう可能性がある。</li> <li>・具体的な論述が乏しくなる可能性がある。</li> </ul>
スライド	画像、図の提示	<ul style="list-style-type: none"> <li>・複雑な事象に対するイメージを画像や図でつかむことができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・場合によっては、視覚的情報が多くなり、認知面での負担になる。</li> </ul>

表2からもわかるように、ICT活用の良さは「即時性」と「同時性」である。クラウドで生徒とやりとりができるようになったことは、「やってみよう」「説明してみよう」という生徒の意欲を引き出した。そこから、教員のフィードバックを即時に受け取りながら、自ら何度も推敲して文章を作成することができた。ドキュメントでのレポート作成はその例である。

1回目のレポートテストでは、論理構成や考察力そして表現・文字の正確さに生徒のばらつきがみられた。半年後に2回目のレポートテストを行ったところ、項目の全てで点数が上がり論理構成力が向上した。レポート作成に必要な土台に、「文章の内容や意味を理解する力」や「インターネットを活用する力」「考える力や分析する力を指す思考力」があげられる。そこで、プリントのQRコード

を読み取りインターネットにある記事を読み、レポートを作成する取り組みも行った。

このように、ICTによるレポート課題の指導は文章を組み立てる回数が増え、社会的事象を具体的に説明する力を育むことに有効であった。ただし、この実践には課題が多く残されている。例えば、日本語の読み書きの指導である。適切な言葉の表現や正しく文章を構成したりする指導にまでは及ばなかった。また、インターネットの情報をうのみにして、そのまま書いたりする危険性もはらんでいる。従って、社会科ではこれまで通りペーパーテストも実施し、評価を行っている。今後、日本語の読み書きの指導とあわせて、どのような実践が生徒にとってより良いかを考えていきたい。

出前授業では、普段の授業からでは得られない気づきや、新しいものへの関心への高まりに有効であった。本年度は以下の出前授業を行った。

I) 「新聞記事に触れよう」(読売新聞大阪本社より) 令和5年8月30日(水)

対象：中学部全学年生徒

内容：新聞記事がつけられるまで、記事のキャッチコピーを考えてみよう

II) 「鳥取県の産農産物を知ろう」(JA全農とっとりより) 令和5年10月26日(木)

対象：中学部2年生(地理分野の学習とリンクさせる)

内容：鳥取県における産農産物を知る、鳥取県のお米について

## ② 授業改善

授業は、板書とスライド、プリントを生徒の実態に応じて組み合わせている。図1は中学部1年生の授業である。教員を2名配置し、T1が授業の指示、説明、発問を行い、T2が板書を行っている。このことで、T1が常に生徒の様子を把握することが可能になり、指示や説明、発問に専念することができる(図1-1)。一方で、T2は生徒の語彙や学力、理解度に応じて黒板に文字やイラスト、図を書き込み、授業を補助する(図1-2)。

本実践は、全日叢研における中学部指定授業を参考にして行ったものである。個々に応じた支援ができるようになり、実際に授業における生徒の発言量が増えた。さらに、教室の中でICTと板書の使い分けも行っている。授業内容にかかわる図やイラストを示すためのスライドは電子黒板に映写し、生徒の手元にあるプリント(図2)と同じ内容の画面をプロジェクターにて映写することで、必要な情報が消えることなく授業を展開することができる。また必要に応じて、デジタル地図を示したり、学習用動画コンテンツを提供したりし、生徒たちが新たに学ぶ用語のイメージをつかめるように工夫している(図3)。このような取り組みは、同じ担当教科の教員が2名配置されていれば可能である。きめ細かな指導を進めていくことは今後の聴覚支援学校において引き続き必要である。

中学部2年生の授業では、先述のとおり、生徒の実態に応じて板書とスライド、プリントを組み合わせ、1年生の授業とは組み合わせを変えて行っている。生徒が調べたことをすぐに共有できるように、ワークシートを拡大し、調べた内容を直接ペンで書き入れる方法をとった。全体で共有しながら、その場で教員による解説、説明、発問を行った。また、少人数であることから、スライドはタブレットで示し、最低限の視覚情報のみを入力できるようにした。広い空間の中で、あえて狭い空間づくりを意識し授業を行うことで生徒の集中力や意欲を促し、教員と生徒、生徒と生徒の対話をうみだすことにつながった。

図 1-1



図 1-2

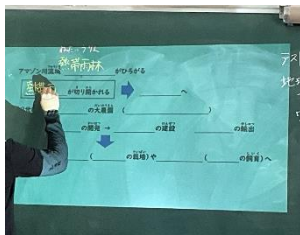


図 2

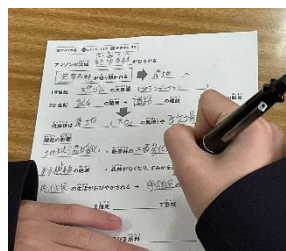


図 3



### (3) 全日聾研での発表

全日聾研の分科会（中高文系）においても社会科における取り組みを発表した（テーマ「聴覚支援学校における社会科の授業について～「覚える」から「考える」授業づくりへ～」）。レポート原稿は本紀要に掲載されているので、詳細は省くが、知識技能を中心としたペーパーテストの点数を重視した評価方法からの脱却をめざし、思考判断表現や主体性をのばすための授業づくり、そしてそのための評価方法や評価システムの見直しについて実践を交えて報告した。

## 3 まとめ

本稿では、社会科における取り組みを紹介したが、ICTを活用した授業づくりは他教科も同様に取り組んでおり、使用頻度や程度の差こそあれ、中学部ではもはやICTは「当たり前」になった。生徒自身がICTを活用して、意欲的に学習を進める土台はできつつある。本年度の第1回校内研究会では、「子供の興味・関心等に応じ、一人ひとりに応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供すること」といった個別最適な学びにむけてICTを有効活用することが重要であるとの知見を得た。ただし、今後に向けて考えるべき課題も多く残されている。聴覚障がい教育を進める学校として、探求的な活動や子ども同士の協働を通してつながりや集団性を育むと同時に、個々の語彙や学力、特性に応じた授業づくりが一層求められる。そこでは、ICTを使うことが目的にならないよう、先に述べた通り、手話表現や板書のスキルや教材の見せ方などが子どもにとってわかりやすい授業につながると考える。次年度は全教科におけるICTの活用状況を明らかにするとともに、教員一人ひとりが手話表現や板書、教材提示のスキルを振り返ることができるように研究を進めていきたい。

## 1. はじめに

高等部では、生徒が積極的に行事の運営に参加し、その経験を通じてリフレクションを行うことの意義について研究し、特に、高等部における行事に焦点を当て、生徒が主体となって行事を運営し、その後の振り返りを行うプロセスについての検証を行った。生徒が行事の運営に積極的に参加することで、彼らの学びや成長にどのような影響を与えるのか、その効果を探求した。

## 2. 生徒参加型の行事運営について

### (1) 期待できる効果

生徒が行事の運営に積極的に参加することは、彼らの主体性や責任感を育む重要な機会である。例えば、文化祭や運動会などの大規模な行事では、生徒が生徒会や各種委員会のメンバーとして参加し、企画立案や準備、運営に携わる。生徒たちは、イベントのテーマやプログラム内容の決定、出し物や展示の企画、演出の詳細など、様々な面で主導権を握って運営を行う。また、学校行事やクラス活動などの小規模なイベントでも、生徒が自らリーダーシップを発揮し、チームをまとめることで、協力やコミュニケーション能力を高めることも期待できる。

生徒が行事の運営に参加することで、彼らは責任感やリーダーシップスキルを養うだけでなく、自己肯定感や自己効力感も高めることができる。自らの意見やアイデアを発信し、実際にそれを行動に移すことで、自信を深めることができることが理由の一つである。また、他の生徒や教職員との協働やコミュニケーションを通じて、チームワークや対人関係のスキルも向上できる。

### (2) 教員と生徒間の連携

生徒が行事の運営に参加する際、教員との連携や相談が欠かせず、教員は、生徒たちのアイデアや意見を尊重しつつ、適切なアドバイスや指導を行うことが必要となる。生徒が提案するアイデアの実現可能性や安全性を検討し、必要なサポートやリソースを提供することで、彼らの自主性や創造性を尊重しつつ、円滑な行事運営を支援することが重要である。

### (3) 共に行事を作り上げるプロセス

教員と生徒が共に行事を作り上げるプロセスは、協働と協力の精神を育む重要な機会であり、生徒たちは教員と協力し、行事の企画や準備に取り組みながら、リーダーシップやチームワークを発揮することができる。教員は生徒たちの意見やアイデアを尊重し、共に議論を重ねながら最良の方針を決定する。このような共同作業を通じて、生徒と教員はお互いに信頼関係を築きながら、行事を成功させるための共通の目標に向かって努力することが大事だと感じる。

## 3. 生徒参加型の行事運営とリフレクションの効果

### (1) リフレクションの活用と実践

行事の運営後に、生徒たちが主体にリフレクションを行う活動を取り入れた。これは、達成したことや課題、改善点について振り返り、次回の行事に活かすための学びを得るプロセスである。生徒たちは、グループディスカッションやアンケートを通じて、自らの経験や感想を共有し、他者との意見交換を行った。一つはKJ法による生徒と教員間でのリフレクションと今後に向けた活動の集約（図1）を行い、もう一つはICT機器を活用したリフレクション（タブレットによるアンケートの実施と集約）の手法も効果的に取り入れた。（図2）

それらのリフレクションの導入により生徒たちがより具体的な課題や改善点を見つけ出し、次の行事に活かすためのアイデアを生み出すことができた。リフレクションのプロセスは、生徒たちにとって重要な学びの機会であり、自らの行動や経験を客観的に振り返り、自己評価や目標設定の重要性を理解することができる。また、他の生徒や教職員との議論や意見交換を通じて、異なる視点やアプローチを学ぶこともできる。これにより、生徒はより深い理解や洞察を得ることができ、次回の行事や日常生活に生かし、活動の向上につなげることができる。

### (2) リフレクションの効果

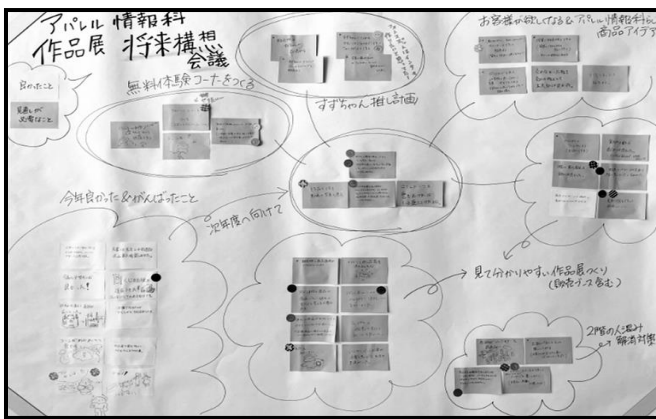


生徒が行事の運営に積極的に参加し、その後のリフレクションを行うことで、彼らの学びや成長が促進される。積極的な参加は、自己肯定感や自己効力感を高めるだけでなく、協力やリーダーシップ、問題解決能力などの社会的スキルを発展させる効果がある。また、リフレクションを通じて、生徒は自らの経験を客観的に振り返り、自己評価や目標設定の重要性を理解することができる。これにより、次の行事や将来の活動に向けて、より意識的な取り組みが可能となり、生徒の主体的な参加とリフレクションの組み合わせは、持続的な学びと成長を支える重要な要素と言える。

#### 4. まとめ

生徒が行事の運営に積極的に参加し、その後のリフレクションを行うことは、彼らの学びや成長を促進する重要な要素だと言える。生徒主体の行事運営とリフレクションのプロセスを通じて、彼らは自己肯定感や社会的スキルを高め、自己成長の機会を得ることができる。今後も高等部としては、生徒の積極的な参加を促し、リフレクションの機会を提供することで、彼らの成長を支援することへと繋げたい。

#### <参考資料>



(図1：KJ法によるリフレクション)



(図2：ICT機器を活用したリフレクション)

## 「寄宿舎におけるリフレクションの重要性」

寄宿舎

### 1 はじめに

校内の研究テーマである「聴覚障がい教育の専門性向上をめざしたリフレクション」を念頭に寄宿舎での研修の企画を行った。校内の研究テーマの設定理由として、近年、教職員の異動が多く、聴覚障がい教育の専門性の継承が難しくなっている現状を踏まえて、①「自分の考え方や行動にスポットを当て、客観的に振り返ることで成功や失敗も含めて多くの知見が得られる」②「集団リフレクションを行うことで改善策を明らかにする」が挙げられている。

寄宿舎では、毎年、校内の研修テーマを受けて、寄宿舎での実践課題に引き寄せた舎内の研修テーマを決めている。舎内の研修テーマは、日常の舎生との関わりを寄宿舎指導員（以下、指導員）の体験をもとに振り返ることから始めることとして「生活教育の実践を集団で振り返り深める」と決定した。本稿ではテーマに基づいた2年間の寄宿舎の取り組みを報告する。

### 2 研修内容

#### (1) 2022年度 グループ討議（2022. 6. 24）

##### ① 研修のねらい

自分と他者（同僚）では、同じ場面に遭遇しても意識を向けていることが同じではないことを知る。教職員一人ひとりの意見・行動には、その人が大切にしている価値観が紐づいていることに気づく。

##### ② 方法

研修係が、「話題提供」として普段の舎生との関わりの中での経験を振り返り、自己の行動や思考を言語化（文書化）し、参加した指導員に提示した。それをもとに3グループに別れ「自分ならどう考え、どう行動するか」を出し合った。

##### ③ まとめ

舎生に対する具体的な指導・支援方法についての意見が多く出され、指導員の意見や行動に違いがあることは明らかにできた。しかし、各指導員の意見や行動の源となっている価値観（その人が大切にしていること）を出し合うまでには至らなかった。時間的な制限があり深めきれなかった面があり、加えて指導員にとっては、自分たちの価値観についての対話よりも具体的な指導・支援方法に関心が高いことが分かった。

また、「自分ならどう考え、どう行動するか」の提起が、課題解決の方法を出し合うことだととらえられたこともあり、個々の価値観に着目するに至らなかった。

#### (2) 2022年度 事例研究会（2023. 1. 27）

##### ① 研修のねらい

舎内の研修テーマである「生活教育の実践を集団で振り返り深める」を意識し、舎生Aの事例を通じて、この間の寄宿舎での支援を振り返り、失敗からも成功からも学び、今後に生かす。

##### ② 方法

舎生Aの直近約3か月間の様子の報告に加え、入舎時に家族や医師、学級担任から得ていた情報をあらためて報告した。また、報告者から、この日の事例研究で話し合っしてほしいこととして、各参加者が①家族関係をどう見ているか②舎生Aの行動をどうみているか③二次性徴期に必要な支援をどのように考えているか、を挙げて意見を求めた。

##### ③ まとめ

事例報告の中では触れられなかった舎生Aの姿が各指導員から紹介されたり、家族支援の必要性についての意見が出された。現状把握という点では成果があったが、関わり方を振り返り、今後

生かす議論という点では十分ではなかった。

### (3) 2023年度 寄宿舍学習会兼事例研究会 (2023.8.4)

#### ① 研修のねらい

奈良教育大学の能勢ゆかり先生を招いての学習会を行う。能勢先生は、寄宿舍指導員としての現場経験もあり、寄宿舍の実践について長く研究をされており、「舎生論議」や「実践論議」に必要な「共通言語」を持つことの大切さを確認する。

#### ② 方法

本校寄宿舍の実践を話題提供として報告した。能勢先生から、話題提供を受けての助言と「生活教育の実践を集団で振り返り深める」をテーマにお話ししていただいた。その後、研修参加者による討論を行った。

#### ③ まとめ

能勢先生から「反省」が変えることのできない過去に目を向けているのに対して、リフレクション(内省・振り返り)は、経験を未来に生かすことであるとの話があった。

話題提供では、舎生Bのある一日の3時間ほどの日常を切り取り、報告者がどのように関わったのか、報告者はその一瞬一瞬にどう判断をしたのか、判断に至る過去の経験は何だったのかが報告された。

能勢先生からは「寄宿舍は変則勤務であり、話し合わないと成り立たない現場である」「個々と集団の振り返りを往還関係で共存させてきた職場でもある」「実践の主体者は職員であり、生活の主体者は舎生たちである(『実践の二重構造』)」「判断するときには常に舎生の側の視点に立つことが大切」とのお話があった。

実施後のアンケートでは、「舎生Bの生活背景や障がいの基本的情報に基づいて討議したかった」との意見が複数あった。舎生理解や今後の関わり方の具体的方策に対する関心が高かった。

### (4) 2023年度 グループ討議 (2023.9.11)

#### ① 研修のねらい

各指導員が「私の舎生C像」をテーマに自分の考えを言語化する。自分が見ている(見ようとしている)舎生Cを認識する。他者の「舎生C像」を知ることで自分の外にある多様な見方に気づく。他者(同僚)の意見や行動の前提になっている判断の基準を知ることで、今後の自分自身の関わり方を考える。

#### ② 方法

指導員一人ひとりの舎生への自分の関わりを言語化(文章化)して、出し合い小集団で対話することとした。指導員13人全員が事前に「私の舎生C像」や「普段の関わり方」を言語化(文章化)し、当日は、研修に参加した指導員に13人分の「私の舎生C像」や「普段の関わり方」の文章をまとめて配付した。

3グループに分かれて、他者が言語化した文章から、それぞれが気づきを得た事柄や自分の「舎生C像」についての意見を述べた。後半は、グループメンバーを変え、前半、グループ討議(集団での振り返り)、各自にどのような気づきがあったのかを含め、後半の意見交流を行った。

実施後、研修に参加した指導員には2つの質問に答えてもらった。

「自分では気がつかなかったが、今日のグループ討議で気づいたことはありますか」

「今日の研修を終えて、今後、舎生Cに関して取り組んでみたいことはありますか」

#### ③ まとめ

指導員が、一人の舎生に対して注目している点や課題として認識している点に違いがあり、働きかけ(支援)の方法に違いがあると、研修企画の段階では想定していた。

実施後アンケートでは「自分とは違う考えが聞けて良かった」との意見もあったが、「大きな意見の違いはなかった」「舎生の見方が共有できていた」などの意見も複数あった。

### 3 考察

4回の研修では、対象舎生の「課題の発見」「課題の解決」が常に議論の中心になった。

一方で、リフレクションの研修の企画は、話題提供者や参加者自身が舎生と関わる時に、どんな経験をもとに関わり方を選択判断し、関わった結果からどんな教訓を得たのかを出し合いたいと考えていた。これらは、どちらも実践者（私たちの側）の視点になっており、寄宿舎での実践を振り返り返る時には、自分の経験や価値観にあてはめて考えるのではなく、舎生の側の視点に立つことが大切だと、能勢先生の助言があった。

舎生との関わりでは、まずそれまでの自分自身の経験をもとに関わることになるだろう。これは、「実践の主体」である私たちの視点である。それに対する舎生たちの反応は「生活の主体」としての反応である。この瞬間を振り返る時、実践者側の視点（経験や知識）で判断してしまうと、これまでの考え方の枠の外に出ることは難しくなる。振り返る時には、舎生の視点で見るのが重要なのだ。そしてそこから得られた気づきや英知を、次の関わり方に活かしていくことになる。

つまり、生活教育実践でのリフレクションは、「①実践の主体として、計画（仮説）を立てて生活の主体である舎生に関わるところから始まる。そして、実際に関わる（経験する）。②関わりの振り返りは、自分の過去の経験をあてはめた評価・判断を保留して、生活の主体者である舎生の視点で見る。③振り返りによって新たな気づき・知見を得る。その時に得た気づきや知見が新たな経験として蓄積される。④その経験をもとに次の関わりの計画（仮説）を立てる」の繰り返りで深めていけるのではないかと考える。

アメリカの組織行動学者であるデイビット・A・コルブが「①経験」「②振り返り」「③概念化」「④実践」のプロセスとして経験学習理論を提唱している。ただ、経験学習サイクルの「②振り返り」がリフレクションであると知識として知っているだけでは、研修企画に落とし込むことができない。舎内の研修テーマ「生活教育の実践を集団で振り返り深める」に経験学習サイクルの理論を落とし込むには、研修企画の場面でも、成功も失敗も意識して振り返る必要があった。

### 4 2年間の研修のまとめ

寄宿舎は、交替勤務の職場である。職員集団が3交替で勤務している寄宿舎では、自分が退勤した後、次の勤務者に実践を引き継いでいかざるを得ない。「何があったか」「自分はどう行動したか」を常に次の勤務者に引き継いでいる。また、宿直者は、必ず舎生一人ひとりの様子を毎晩、記録に残している。毎日、実践（経験）し、毎日、書き残している。しかし、経験しただけでは不十分である。各職員の関わりが「舎生にとってどんな影響があったのか」「この経験で分かったことを別の場面でも生かせるか」を舎生の立場で振り返ることが習慣化できれば、実践の力量を高めていけるはずである。これを寄宿舎での「専門性の向上」と呼べるのではないだろうか。

寄宿舎の仕事は、自分一人で完結することが少なくチームとして行っている。職員が個として舎生と関わったことを、集団に還元している。また、集団で論議したことが個としての職員が次に舎生と関わる時に生かされる。

生活場面では、前にうまくいったことが次にも当てはまるとは限らない。舎生の成長・変化、舎生集団の組み合わせの変化などにより常に実践・関わり方を再構築し続けなくてはならない。経験豊富な指導員が多い寄宿舎でも振り返り（リフレクション）は大切である。

社会の変化に伴い舎生の生活も変化し続けている。これまでの寄宿舎の常識が通用しないこともある。私たちの知識や経験、学校外で学んできたことなどを突き合わせて試行錯誤している毎日である。自分たちの中に思い込みはないか、柔軟な考え方ができているか、経験豊富な指導員が多い寄宿舎だから気づきにくい面もある。若い指導員、他校で経験を積んできた指導員、別の職業・職種を経験した指導員による「見方・見え方」は貴重だ。実践を集団での振り返る視点をもった研修企画を今後も続けていきたい。

#### 「参考文献」

リフレクション(REFLECTION) 自分とチームの成長を加速させる内省の技術  
著者：熊平美香 出版社：ディスカヴァー・トゥエンティワン（2021）

## 第57回 全日本聾教育研究大会奈良大会・分科会報告

### 第2分科会

幼児との関わりから見えてきた、コミュニケーションを広げるための取り組み  
～日々の保育を通して、伝え合う力を身につけるために～

### 第8分科会

聴能担当の専門性向上及び継承に向けた取り組みについて  
～事例検討会（近畿教育オーディオロジー研究協議会）での学びをとおして～

### 第7分科会

自分を知る、相手に説明する力を育む自立活動  
～聴覚障がいの先輩から学ぶ場を通して～

### 第13分科会

聴覚支援学校における社会科の授業について  
～「覚える」から「考える」授業づくりへ～

## 幼児との関わりから見えてきた、コミュニケーションを広げるための取り組み

～日々の保育を通して、伝え合う力を身につけるために～

第2分科会

大阪府立中央聴覚支援学校 幼稚部

壺井沙織 森本 朱香

【概要】近年聴覚支援学校では、聴覚障がい他に発達障がいなどさまざまな障がいを併せ有する子どもが在籍することが一般化している。そのなかで、子ども一人ひとりのコミュニケーションを広げるために、個々に応じた支援をすることが重要視されている。本校幼稚部にもそのような子どもが多数在籍している。学年の中で支援を必要とする本対象児（A 児）について、入学から現在までさまざまな支援に取り組んだ結果、変化が見られているので報告する。

【キーワード】 コミュニケーション・視覚支援・幼児理解・人間関係

### 1 はじめに

現在年中（4 歳児）の子どもたちが入学した当時は、一人ひとりが表出できることばがまだ少なく、伝え方が分からずやりとりもまだ成立していない状態だった。一学期の間は、指さしや身振りで表出することがほとんどで、手話模倣や絵カードなどの視覚教材を介した、教員との一対一でのやりとりが中心だった。毎日手話模倣や視覚教材を使ってやりとりを積み重ねたことで、二学期になると子どもが少しずつ自分から手話で表出したり、“相手に伝えたい”気持ちが芽生えたりするなど、一人ひとりに変化が見られるようになった。そのなかで、A 児について取り上げて紹介する。

### 2 A 児について

- ①両耳に人工内耳を装着している。自分の興味のある生活音には反応する。
- ②自閉傾向がある（未診断）。自分の中でルールを決めて自分が納得できるまで、一つの物事をやり遂げたい気持ちが強い。
- ③人の耳やほくろ、服の袖など特定のものに興味をもち、気になると触ろうとする。

### 3 支援について

#### （1）実態を把握する

日々保育をするなかで、A 児の様子や行動について観察し、保育終了後に気づいたことや対応

に困ったことなどをクラス担任同士で話し合った。

#### （2）支援方法

A 児の実態を把握しながら、支援方法についてクラス担任で話し合い、実践した。

- ①登下校時の用意の流れや予定などの絵カードを作ったり、その場で絵を描いたりしながら、状況や内容を説明する。
- ②クラス担任との関係を築くために、日々の保育では A 児と関わる教員を 2 週間おきに交代し、行事では関わる教員を固定する。
- ③A 児の表情・態度・言いたいこと・気持ちなどを汲みとって、ことばに変換して伝え方を教える。
- ④状況変化に合わせて気持ちの切り替えができるように、クールダウンする時間を作る。
- ⑤保護者と連携するために、登校時や個別指導の時間などに A 児の様子について情報交換をする。
- ⑥一日の保育の振り返りプリントを作成して、家庭でもそのプリントを活用して保護者とやりとりができるようにする。

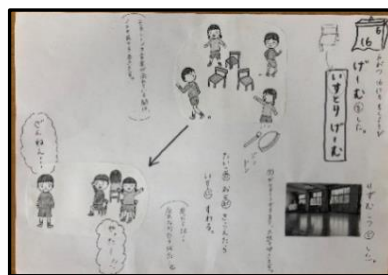


図1 保育の振り返りプリントの例

保育の振り返りプリントは、学年の取り組みとして子ども全員にも配付した。

### (3) 支援の結果

①絵カードを見て行動することができたが、絵によっては教員と A 児の見方が異なる場合もあると分かり、その都度絵カードを作り直しながらかんわった。状況によっては○か×かを示して説明し、ルールを確認すると、次からは気をつけて行動する様子も見られた。



図2 絵カード・イラストの例

②A 児とじっくり関わる時間をもつことで、関係を築くことができた。A 児の言いたいこと・気持ち・行動を汲み取って言語化したり、視覚教材を用いたりしたことで、簡単なやりとりができるようになってきた。

③イラストを描いて教員と A 児で確認し、手話模倣を促すと手話を覚えていった。覚えた手話単語を使って、自分がしたいことを伝えることができるようになった。

④A 児の気持ちが落ち着くまで見守ったあと、絵を描いて状況を説明すると気持ちを切り替えて集団活動に参加することができた。しかし、内容によっては切り替えが難しい場面もあった。

⑤振り返りプリントを通して親子で会話することが増え、家庭でもさまざまなことばを覚えることができた。

⑥家庭と学校の様子について保護者と話をし共有することで、A 児の成長を感じることができた。課題についても共有し、一緒に取り組めるようにした。年中(4歳児)の現在も継続している。

## 4 A 児の変化・課題

### (1) 年少(3歳児)時

朝のあつまりやおかえりなど決まった保育やパターンのある保育については、慣れてくると見通しがもてるようになった。最初は絵カードを介して伝えていたことを、手話を使った声かけだけでもそのことばの意味を理解して行動に移すことができるようになった。

手話と合わせてことばを覚えたことで手話だけで通じることは増えたが、状況によっては絵カードなどの視覚教材を使って理解を促す必要もあった。また、自分で表出できる語彙数がまだ少ないので、伝えられないもどかしさから表情や行動で示すことが多く見られた。

### (2) 年中(4歳児)現在

人への興味が広がり始め、友だちの名前を覚えて自分から「○○は?」と聞いたり、「△△はお休み。」と伝えたりすることができるようになってきた。また、見通しをもって行動することができるように教員が絵カードやイラストを使って事前に説明すると自分で理解して、状況に合わせて気持ちを切り替えて行動することができるようになってきた。

教員との関わりを通して、手話を使って音声で簡単なやりとりができるようになっているが、友だちとのやりとりは教員が間に入って伝え合っている。また、自分の思いや気持ちを、身振りや教員の手を引いて伝えることが多く見られるため、少しでも自分のことばで伝えられるように支援を続けている。

## 5 おわりに

最初は A 児の実態を受け止めながらコミュニケーションをとることが難しかった。しかし、関わりを通して A 児から学ぶこともたくさんあった。

子どもと関わりながらコミュニケーションを広げていくためには、担任は子どもとの関係づくりを大切に、日々の関わりの中で子ども一人ひとりの理解を深め必要な支援をすること、学年担任と保護者が連携して子どもの成長に共通の目標をもちながら関わり、支援することが大切だということを再確認できた。

# 聴能担当の専門性向上及び継承に向けた取り組みについて

～事例検討会（近畿教育オーディオロジー研究協議会）での学びをとおして～

第8分科会

大阪府立中央聴覚支援学校 中咲 智香子

【概要】近年、聾学校における専門性の向上及び継承が課題となっている。聴覚障害児の心理を十分に理解したうえで、最新の補聴器や人工内耳、補聴器フィッティングに関する知識や技術が必要とされる聴能担当には、非常に高い専門性が求められるが、その習得には相当の年月を要する。人事異動に伴って、聴能業務の経験年数が浅い教員のみ体制となるケースもあり、学校の枠を越えて学び合う場が必要とされている。そのような状況がある中で、近畿教育オーディオロジー研究協議会が定期的に実施している事例検討会は、これまで大きな役割を果たしてきた。事例検討会の取り組み及び今後のあり方について、近畿教育オーディオロジー研究協議会がまとめた内容を報告する。

【キーワード】 聴能 教育オーディオロジー 専門性の向上及び継承

## 1 はじめに

近畿教育オーディオロジー研究協議会は、聴覚障害教育における聴覚管理や補聴器フィッティング、聴覚学習などの教育活動を「教育オーディオロジー」として確立し発展させることを目的に、1999年に設立された。近畿地区の公立学校（特別支援学校、小学校、中学校、高等学校、幼稚園）に勤務する教職員によって構成され、近畿地区聾学校校長会及び近畿地区の聾学校・難聴学級・通級指導教室などの理解と協力を得ながら、各教育機関が連携して研修及び研究を行っている。

主な活動内容として、講習会・研修会の開催などが挙げられるが、年間3回実施している事例検討会は、各聾学校の聴能担当者が事例を持ち寄り、議論を重ねる自主研修の場となっている。

## 2 研究目的

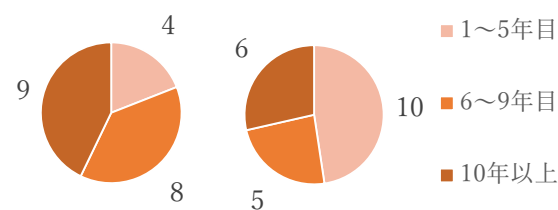
聾学校では、ベテラン教員の転勤と同時に、赴任したばかりの教員が聴能担当を任されるケースがある。自校の協力体制のみでは、専門性を維持しにくい状況があるため、学校間を越えた連携及び学びの場として事例検討会が発足した。

事例検討会の取り組みや役割、意義について明らかにするとともに、今後のあり方を見出すことをねらいとする。

## 3 研究の方法について

### (1) 聴能担当者の現状

近畿教育オーディオロジー研究協議会の代表委員（令和5年度）を対象に、アンケート調査を行った。回答数21のうち、聾学校での勤務年数及び聴能業務の経験年数を図1に示す。



聾学校での勤務年数 聴能業務の経験年数

図1. 聾学校での勤務年数及び聴能業務の経験年数と人数

各聴能担当者が日々行っている聴能業務の内容を図2に示す。

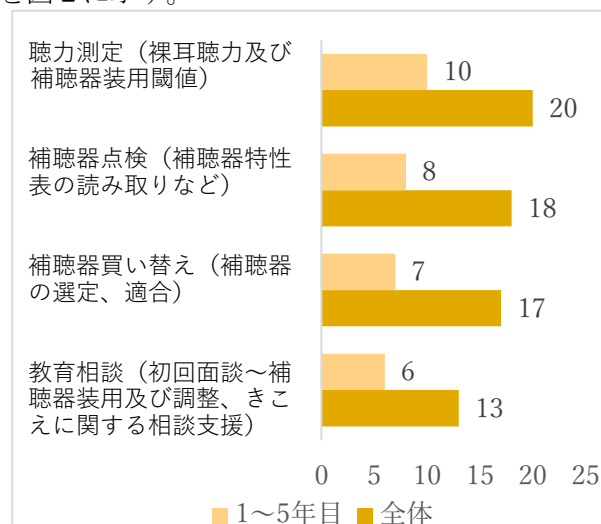


図2. 日々行っている聴能業務（複数回答可）

### (2) 事例発表の内容

近年（2018.4～2023.3）の事例発表の内容を表1に示す。

表1. 事例発表の内容

A) 「乳幼児の補聴器調整」2018.7.7 乳幼児の補聴器利得調整の方法についての検討
B) 「Excelによるオーディオグラム描画」2018.12.8 スケールアウトや3kHz等の測定の有無に正しく対応できる線分描画の工夫の紹介
C) 「オーディオメータからExcelへのデータ転送とAI算出機能の実装について」2019.3.2 データ通信による業務効率化と、明瞭度指数算出機能の実装



についての報告
D) 「人工内耳装用児の発達変化」2019. 11. 30 本校人工内耳装用児の発達変化経過についての報告
E) 「人工内耳装用児の対応」2021. 3. 6 保護者支援・医療連携・マップの読み取りについての事例
F) 「モデル社 ADHEAR の装用事例」2021. 12. 11 骨導補聴器装用児の ADHEAR 新調についての事例
G) 「人工内耳とアレルギー反応」2022. 3. 5 送信コイルのアレルギー反応についての報告
H) 「ナイーダ P30-UP の調整及び各校のフィッティング処方選択について」2022. 7. 2 利得調整及びフィッティング処方選択についての検討
I ) 「日本語を母語としない聴覚障害児の言語力評価」2022. 12. 10 中国語による言語力評価及び教育相談の報告
J) 「3A インサートイヤホンを使用した事例」2022. 12. 10 イヤホンの出力の実測と換算法、気導値の予測など
K) 「聴力個人内差の視覚化について」2023. 3. 4 オーディオグラムを経時重畳描画ならびに周波数ごとの年月日-聴力レベル図の描画機能の実装についての報告
L) 「補聴器の調整 (3 歳児) 聴力に左右差がある場合」2023. 3. 4 聴力に左右差がある場合の補聴器調整についての検討

表 2. 項目別分類

補聴器調整	A H L
人工内耳	D E G
聴力測定関連	B C J K
言語力評価	I
その他	F

A) ~L) を「補聴器の調整」「人工内耳」「聴力測定」「言語力評価」「その他」の項目に分類した結果を表 2 に示す。

### (3) 事例検討会についての意識調査

事例検討会について、5段階評価の意識調査を行った結果を表 3 に示す。上段は事例検討会への参加経験がある 17 名、下段はそのうち事例発表の未経験者 10 名を対象にした結果である。

表 3. 事例検討会に参加して感じたこと

1 全くない — 5 非常にある

	1	2	3	4	5
新たな視点や解決策を得ることができたと感じるか	0%	0%	0%	47%	53%
	0%	0%	0%	60%	40%
自校の取り組みをより改善できることに気付いたか	0%	0%	12%	35%	53%
	0%	0%	20%	40%	40%
自校の特徴(強み・弱み)がより明確になったか	0%	0%	6%	59%	35%
	0%	0%	10%	70%	20%
他校とのネットワークが広がったと感じるか	0%	0%	0%	29%	71%
	0%	0%	0%	50%	50%
聴能に関する知識を増やすことができたか	0%	0%	6%	24%	71%
	0%	0%	10%	40%	50%
わからないときに積極的に質問することができたか	0%	18%	35%	24%	24%
	0%	20%	50%	20%	10%
必要な知識が多すぎると感じたか	12%	29%	41%	12%	6%
	0%	30%	40%	20%	10%
話題の進行が早すぎると感じたか	41%	41%	18%	0%	0%
	40%	50%	10%	0%	0%

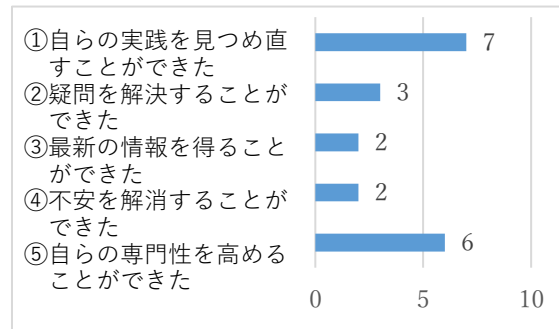


図 3. 事例発表をして良かったと感じる内容 (7 名)

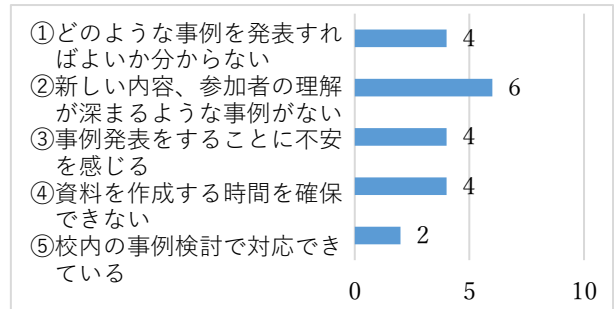


図 4. 事例発表をしたことがない理由 (10 名)

## 4 結果と考察

聴能業務の経験年数が 1~5 年目の教員が全体の約半数を占め、教育相談を含めた幅広い聴能業務を担っていることがわかった。各校の聴能担当者が参加する事例検討会では、補聴器調整や人工内耳、聴力測定周辺機器についての内容が主になっており、参加者は「他校とのネットワークの広がり」「聴能に関する知識の向上」などの点で、事例検討会の意義を感じている。

事例発表の経験者は「自らの実践を見つめ直すことができた」「自らの専門性を高めることができた」などの点で、発表して良かったと感じている。一方で、「新しい内容、参加者の理解が深まるような事例がない」などの理由によって、事例発表の経験者は全体の半数に満たない。事例発表の未経験者は、事例検討会に参加することで自校の特徴がより明確になるなど、それぞれ学びを深めているが、事例発表をすることで、さらなる専門性の向上に繋がると考える。事例の設定が難しく発表に繋がりにくいケースについては、今後、テーマに基づいた事例発表の機会を設けたい。学校の枠を越えて学び合うことで、近畿地区全体で連携を深め、専門的な視点に基づく聴覚障害教育を展開していきたいと考える。

# 自分を知る、相手に説明する力を育む自立活動

～聴覚障がいの先輩から学ぶ場を通して～

第7分科会

大阪府立中央聴覚支援学校 中学部 明石 慈英

【概要】きこえない・きこえにくい自分と向き合いながら、日々社会生活や日常生活を送っている先輩との出会いは、生徒自らのロールモデルになりうる。本校中学部では、自立活動にて多くのきこえない先輩と出会う場を設けてきた。本発表では、これまでに実施した内容を紹介し、成果及び課題を明らかにすることで今後の展望を考えていきたい。

【キーワード】 ロールモデル 障がい認識

## 1. はじめ

本校の自立活動では、「自立活動プログラム ver 3」に基づいて系統的な指導を行っている。早期教育相談から高等部までそれぞれの発達段階に応じて指導内容を編成している。中学部では「聴覚学習」「書記日本語」「手話」「障がい認識」の4つの柱に沿って指導を進め、担当者がローテーションを組み授業を行ってきた。

## 2. 取り組みの目的及び背景

先述のとおり、4つの柱をもとに、自身の障がいと向き合う経験を3年間かけて積み重ねてきた。最後には「自分の説明書」を作成し、自身のきこえや必要とする配慮を言語化し、他者に説明する場を設けてきた。過去には、作成した「自分の説明書」を進学先の高等学校で活用して、クラスメイトに説明した例もある。ただ、私たち自立活動教員がもっていた問題意識としては、身近なロールモデルとの出会いが少ないことがよく挙げられてきた。現在社会で活躍しているきこえない先輩は数多くおり、その職種も多種多様である。しかし、そのような先輩と出会う機会は非常に限られていた。

一昨年度の1学期に中学部3年生に行った授業「ろうの先輩を知ろう」において、生徒たちは、インターネットから得た情報を懸命にまとめ、発表することができた。しかし、それはあくまで媒

体を通じた情報であり、その人の生きざまを知ることができた、とは言い難いものであった。そこで、生徒が調べた人物を実際に本校に招き、対話する企画を立案した。きこえない先輩と出会うことで、さまざまな生き方を知り、自分の将来像を形成することにつながると考えたからだ。本来であれば、対面が好ましかったが、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点により、Web会議システムによるオンライン形式にて実施した。事前に生徒たちが質問を考え、講話+インタビュー形式にて進めた。生徒からは「どうやってきこえる人とコミュニケーションをとっているか」「きこえなくて良かったと思った時は？」といった質問があり、社会で活躍されているきこえない先輩の回答と力強いメッセージを受け取ることができた。

## 3. 取り組みの概要

これまでに行ってきた取り組みを示す。

表1 令和3年度より行ってきた内容

日時	テーマ	方法
令和3年6月	デフサッカー	オンライン
令和3年10月	情報保障	オンライン
令和3年11月	留学体験談	オンライン

令和3年 12月	ろう通訳	オンライン
令和4年 1月	盲と音楽	対面
令和4年 9月	ろうと音楽	対面
令和4年 10月	デフバレーボール	対面
令和5年 2月	電話リレーサービス	対面 オンライン
令和5年 6月	デフラグビー	対面

令和3、4年度には「ろうの職業ガイド作成」(中学2年生対象)において、教員を通してメールなどで実際にきこえない先輩にインタビューをするという取り組みも行った。



図1 活動の様子①



図2 活動の様子②

#### 4. 成果及び課題

毎回の取り組み後には、事後アンケートをとった。

①工夫しながら持てる力を発揮してほしいというメッセージ

事後アンケートには、「壁に何回もぶつかったらいいと勉強になりました(デフサッカー)」、「きこえる・きこえないというのは関係ないときいて自信がもてました(デフラグビー)」といった感想がみられ、取り組みを通して、生徒なりにメッセージを受け取り、自身の障がいを前向きに捉えようとする様子がうかがわれた。また、「ろうの中でも多様なコミュニケーションがあると知った(ろう通訳)」、「時間を確認する時に数字を指で触って今の時間を確認しているのがすごい(盲と音楽)」など、さまざまな工夫によって自分のもって

いる力を発揮しているということを学ぶ姿もみられた。同じような悩みをもつ大人からのメッセージは生きた言葉であり、「自分だったらどうするか」を考えるきっかけになる。

#### ②周りに発信しながら生きる大切さ

思春期特有の課題として、「支援を受けることが恥ずかしい」「1人で頑張らないといけない」が挙げられる。これらは、自己の障がいを客観的に見つめる機会が乏しいことにあると考えられる。今回の取り組みの中で「支援を求めてもいい」と繰り返し伝え、実際に支援を求めながら生活を送っている先輩の姿にも接することができた。事後アンケートからも、「自分のことについて説明しないと相手もわからないので、きちんと説明すべきだなと思いました。(デフサッカー)」、「1人で乗り越えられない時もあると素直に認めることも必要(情報保障)」と自分から周りに発信する大切さに気づく様子が見受けられた。さらに、電話リレーサービスの講演では、「初めて電話リレーサービスをしているところを見て、便利そうだと思いました。」といった感想もあり、世の中にあるツールを自分に合った方法で活用しながら、きこえる人と関わりをもつ大切さを学ぶことができたといえる。

今後の課題として、これらをいかに3年生の最後に取り組む「自分の説明書」作成につなげていくか、ロールモデルとの出会いが生徒自身の「なりたい自分」を形成するにあたってどのように生かされているかを卒業後も追跡調査したいと考える。また、中学生時代には他にどのようなメッセージや情報が伝えられるべきか、どのような場の設定が必要かを学部全体で考えていきたい。

# 聴覚支援学校における社会科の授業について

～「覚える」から「考える」授業づくりへ～

第13分科会

大阪府立中央聴覚支援学校 大山遼太郎 中熊朋也

【概要】本校中学部社会科では従来より、知識・技能を中心にペーパーテストの点数の良しあしを評定の判断材料として重視しており、思考力や主体性をのばす指導や授業づくりが重視されていないという課題があった。そこで、評価システムや評価方法を見直し、生徒たちが自ら考え、主体的な力を育むために、令和4年度より、本校中学部社会科では、3つの柱を立て取り組んだ。その取り組みの実践内容および経過を報告する。

【キーワード】 中学部 社会科 指導力の向上

## 1 はじめに

本校中学部では、教科書に準ずるグループにも、発達障害を併せ有する生徒や外国籍の生徒在籍しており、語彙力や読解力が弱い生徒も増えている。また聴覚障害のある生徒たちは「受容する情報が制限されやすく、その情報のもっともたるものが言葉であることから、言葉の習得および言語概念の形成が困難になりやすい」と大西孝志(1)が述べていることから、日本語に苦手意識を感じ、歴史的事象の説明を問われる書字を苦手としている生徒も少なくない。そのことから、社会科に対して苦手意識を抱いている生徒が多くみられた。また人物名や歴史上の出来事の名称を覚えるのが苦手、「日本語や漢字を書くのが苦手だから」という生徒もいた。

そこで、「覚える」から「考える」授業づくりをめざした。生徒たちが自分から意欲的、主体的に学ぼうとする力と論理的思考力を育むことをめざし、ここでは昨年度から、これまでの実践について報告する。

## 2 実践報告

### (1) 実践概要

令和2年度までの、本校の社会科の評価方法は、定期的なペーパーテストのみだった。この方法だと知識・技能の評価に偏ってしまい、思考力や主体的な学びの育成を図り、それらを適切に評価することができなかった。そこで昨年度から「ICTの活用」「記事問題」「外部機関の連携」を授業の中に取り入れ、社会科の主体的な学びを取り入れた。

### ①1つ目の柱～ICT活用の可能性を広げる～

文部科学省が提唱している、GIGAスクール構想のもと、今や本校の中学部では、生徒たちが、一人

1台端末を持ち、ICT活用を活用した授業形態となっている。社会科でもデジタル資料を提示したり、調査活動で情報を集めたりするなどICTを活用した授業を行った。(↑地理学習にて、九州をテーマにした調査活動の様子。)しかし、学習内容の視野を広めることができても、「自ら積極的に取り組み、考えを深めていくもの」へと深化するには不十分だと考え、さらに下記の取り組みを行っていくことにした。



1. タブレットを用いた小テスト
2. タブレットを用いたレポート作成

どちらも Google for Education の Google サービスを活用している。

ここでは2のレポート作成を紹介する。問いを提示し答えを立てた筋書きを、論理的に説明する力や思考する力を育むことをねらいとしている。そして「題意把握・内容理解」「論理構成・考察力」「表現・文字の正確さ」「引用・出典明示」この4つをもとに評価を行い、さらに教員が正しい書き方を生徒に示し、言語表出力の向上をはかっている。

### ②2つ目の柱～記事問題を通して～

記事に対する自身の考えを提示するために「正しく読み取る力」「インターネットを活用する力」「比較する力」「思考力」の4つの力が必要である。そこでこの4つを区分化し、それぞれのテーマをもとにトレーニングを行っている。

### ③3つ目の柱～外部機関との連携～

座学とは違う視点から社会的な事象を理解し、考えるきっかけづくりとして、出前授業を取り入れた。そこで令和4年度 JA 全農とっとり「鳥取県の農

作物」をテーマに出前授業を行った。令和5年度は、読売新聞大阪本社の出前授業と、昨年度に引き続きJA全農とつりの出前授業を実施する予定である。



## (2) 実践の経過

### ①1つ目の柱～ICT活用の可能性を広げる～

1回目のレポートテストでは、「題意把握・内容理解」「引用・出典明示」の評価は一律として、高得点であった。しかし「論理構成・考察力」「表現・文字の正確さ」はばらつきが見られた。そこで論文の基本的なルールや書き方をトレーニングし、教員による添削を行いレポートに慣れていくことをはかった。2回目のレポートテストでは、「論理構成・考察力」面で僅かではあるものの改善がみられた。生徒自身の考えを言語化し、わかりやすく説明する上で「論理構成・考察力」「表現・文字の正確さ」は欠かせない。しかし、その力は一朝一夕でできるのではなく、地道に長期的かつ定期的に練習を繰り返すことが重要である。

もとより生徒たちの社会的事象の理解度は高く、タブレットを用いた小テストでは、ペーパーテストを用いた小テストよりも正答率が高かった。そもそもペーパーテストとタブレットテストの共通事項は、理解しているかどうかを測るためであり、異なる点は、書字活動があるか否かであった。ペーパーテストでは筆記で回答するが、それに対してタブレットテストでは、デジタル化によって効率よく回答できることにあった。これは前述したように日本語を言語化する力が弱いことが起因であると考えられる。また小テストでは、理解度をはかることをねらいとしているため、タブレットテストによる選択問題であっても「点数があがった」という喜びは、次回もいい点数をとりたいというモチベーションにもつながる。こうして主体的な学びにも直結していくと考えている。

### ②2つ目の柱～記事問題を通して～

はじめは、新聞記事を実際に読んでいないものが大半であった。「記事の内容に対して、意見を述べよ」と問うと「〇〇はだった」と単調な感想を述べる生徒、記事の読み方もわからない生徒が多かった。

そこで記事を読み取る力のトレーニングを行い。正答率を上げることができた。①の1つ目の柱の実践と同様に、定期的に学習することで、記事を読み取り生徒自身の考えを提示する力はついてくるこ

とに再認識することができた。

### ③3つ目の柱～外部機関との連携～

当事者である農業関係者からの授業は、生きた教材にもなり得るため、農業に触れあう機会が少ない子どもたちにとっては、農作物がどのように出来、鳥取県から大阪の本校の給食に流通していくのかが知る機会ができ新鮮だったようである。このように外部機関を通して、実際に触れたり目にしたりすることで思考力が培われていくと感じた。

教科書に準じた内容を学習すると同時に、当事者から学習することも重要であると考えている。今年度も出前授業を予定しており、出前授業の前後にアンケートをとることで生徒たちの心情の変化を見ていくことにしていきたい。

### (3) 本校社会科教員の視点から

レポートテストや記事問題などの取り組みによって、生徒たち徐々に5W1Hを意識して説明しようとする姿勢がみられるようになった。自分で解に導くためにはどうすればよいのかを考え、試行錯誤していく。そして、正解だった時の喜びは自身の成功体験に蓄積していく。こうして、社会科に対するイメージも変わっていった生徒もみられた。

## 3 最後に

「歴史のほうが好きかも。全部人間の感情につながるから、今と変わらないね」これはある生徒が、社会の授業が終わった後、教員に話した内容である。ほかにも「地理の方が好き」と述べている生徒もいた。またある学年の大半は、「もっと頑張りたい教科」として「社会科」と答えていた。このように社会科が苦手とする意識は減り、意欲が高まっているもののまだまだこれからだと考えている。これからも取り組みを継続していきたい。

## 参考

(1)大西孝志 (2011) 「言語指導と言語活動の充実」『聴覚障害 第66巻 1月号』

(2)文部科学省 [GIGA スクール構想について:文部科学省 \(mext.go.jp\)](https://www.mext.go.jp)

